

こころ はぐくもう



「人生いかに生きるべきか。」と自らに問い続ける道徳教育の充実は、子どもたち一人一人のウェルビーイングの向上のために、大きな役割を担っています。

本リーフレットでは、各学校における道徳教育の充実に向けて、子どもや学校、地域の実態を考慮して、学校の道徳教育の重点目標を設定しながら特色ある道徳教育を推進している学校を紹介しています。また、「特別の教科 道徳」の授業において活用できる教材及び指導例を掲載しています。本リーフレットを参考にいただき、子どもたち一人一人の心を育むことに役立てていただければ幸いです。

令和8年3月

奈良県道徳教育振興会議
奈良県教育委員会事務局義務教育課

よりよく生きるための

幼稚園

道徳性・規範意識の芽生えを培う

幼児の道徳性・規範意識の芽生えを育むために、遊びや生活の中で、幼児同士の気持ちのぶつかり合いや楽しく遊びたいのにうまくいかないといった思いが生じた場面を捉えて、適切な援助を行うことが求められます。



道徳性・規範意識の芽生えは、領域「人間関係」のみで育まれるのではなく、幼稚園教育要領第2章に示す、ねらい及び内容に基づく活動全体を通して育まれることに気をつけることが大切です。

小学校

自己の生き方についての考えを深める

各学年を通じて、自立心や自律性、生命を尊重する心や他者を思いやる心を育てること、また各学年段階において次の事項に気をつけることが求められます。

低学年

挨拶などの基本的な生活習慣を身に付けること、善悪を判断し、してはならないことをしないこと、社会生活上のきまりを守ること。

中学年

善悪を判断し、正しいと判断したことを行うこと、身近な人々と協力し助け合うこと、集団や社会のきまりを守ること。

高学年

相手の考え方や立場を理解して支え合うこと、法やきまりの意義を理解して進んで守ること、集団生活の充実に努めること、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重すること。

令和7年度 奈良の子どもの未来を拓く

橿原市立 耳成南幼稚園

園教育目標

豊かな自然の中で、仲間と共に生き生きと主体的に遊びに取り組み、心身ともに健康で、調和の取れた人間形成の基礎を培う。

【育てほしい姿】

友達と様々な経験を重ねる中で、他者の気持ちを理解し思いやりをもって行動する。

道徳性・規範意識の芽生え

4歳児

自分にも相手にも気持ちがあることに気付き、関わろうとする。

5歳児

相手の立場や気持ちを大切に考えながら、行動する。

【取組】

家庭や地域社会との連携

- ・少数保育参加、未就園児活動
- ・おはなしの会
- ・PTA活動と共に地域のボランティア活動を実施（夕涼み会、運動会、もちつき、除草作業等）



小学校との連携

- 1年生と…運動・楽器遊び、夏の遊び、授業体験等国語科や生活科に繋がる活動の実施。
- 5年生と…給食体験、掃除の仕方、運動会や音楽会の見学などを実施。



※毎月、園児と児童が行き来することで、安心した環境の中でお互いの名前を覚え、身近な存在になっている。

橿原市立 耳成南小学校

学校教育目標

たくましく、自ら学ぶ、心豊かな児童の育成

【道徳教育の重点目標】

- 基本的な生活習慣を確立し、自主的・自律的に行動しようとする態度を育てる。
- 思いやりの心を持ち、友達と互いに信頼し助け合う態度を育てる。
- 集団に進んで参加し、自分の役割を果たそうとする態度やきまりを守る態度を養う。
- 自然や生命を大切にする心や感動する心を育てる。

【取組】

「考えが広がり深まる道徳科」の授業づくり

- ・各学年1本の公開授業と研究協議
- ・全員参加の模擬授業



学校全体の取組

- ・重点内容項目（【自主、自立】【友情、信頼】【集団生活の充実】【自然愛護】）を設定し、全ての教育活動において、道徳教育との関連性を意識する。
- ・生徒指導の取組として、児童による、月目標のポスターの作成と呼びかけ。



家庭や地域社会、幼稚園との連携

- ・1・5年生を中心とした幼小交流
- ・年1回のなかま参観
- ・学校運営協議会、PTA評議員会での周知
- ・「学校だより」「みんなの学校」等での啓発

基盤となる道徳性を養う

中学校

人間としての生き方についての 考えを深める

小学校における道徳教育の指導内容を更に発展させ、社会的な要請や今日的課題についても考慮し、次の5項目について気をつけることが求められます。

- 自立心や自律性を高め、規律ある生活をする事。
- 生命を尊重する心や自分の弱さを克服して気高く生きようとする心を育てること。
- 法やきまりの意義に関する理解を深めること。
- 自らの将来の生き方を考え、主体的に社会の形成に参画する意欲と態度を養うこと。
- 伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重すること、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けること。

高等学校

人間としての在り方生き方への 自覚を一層深める

中学校までの特別の教科である道徳の学習等を通じて深めた、主として自分自身、人との関わり、集団や社会との関わり、生命や自然、崇高なものとの関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基にしながら、様々な体験や思索の機会等を通して、人間としての在り方生き方についての考えを深めるよう気をつけることが求められます。

高等学校段階では、一人一人が人生を歩んでいく上での手掛かりや内面的な基盤を確立すべき時期であり、国家及び社会の責任ある一員として必要な教養や行動規範などを身に付けていくことが期待されます。



道徳教育推進事業～指定地域・校での取組事例～

大和郡山市立 郡山東中学校

学校教育目標

「翔」～心身共にたくましく成長し、豊かな人間性を携えて大きく社会に飛び立つことのできる生徒の育成～

【道徳教育の重点目標】

主体性をもって集団や社会に貢献するとともに、相手の個性や立場を思いやり認め合う生徒を育てる。

第1学年

思いやりの心を持ち、集団生活の向上に努める。

第2学年

自己の役割と責任を自覚するとともに、相互理解を深める。

第3学年

自主的に考え、判断、行動し、自己の生き方への展望をもつ。

【取組】

授業力向上に向けて

- ・道徳科の授業をローテーションで行い、互いの授業を参観。
- ・授業づくりの研修と授業公開を毎学期実施。



学校全体での取組

- ・毎月1回ボランティア活動「ちょボラ」の実施。
- ・重点内容項目（【自主、自立】【節度、節制】【相互理解、寛容】）を意識した特別活動の実施。（苗木のスクールステイ、全校じゃんけん大会等）

家庭や地域社会との連携

- ・PTAや地域の方と「クリーンザ東中」を実施。
- ・道徳科の授業を保護者や地域の方に公開。



奈良県立 橿原高等学校

学校教育目標

生徒一人一人の個性、能力を最大限に伸ばし、学力の徹底的啓培に努めるとともに節度ある生活をとおして育まれるたくましい心身をもつ人をつくる

【道徳教育の重点目標】

- 自他の生命や人格を尊重し、多様な価値観を認め、思いやりのある心を育成する。
- 基本的な生活習慣を確立させ、規範意識の高まりを目指し、社会の一員として自覚と責任をもたせる。
- 多様な学びの場から自らの在り方、生き方を主体的に探求し、自己実現を目指す生徒を育成する。

【取組】

各学年における道徳教育ホームルーム

- ・各学年で設定したテーマについて、自校で作成した動画教材をもとに展開。



教科学習

- ・公民科の「公共」の授業を通して道徳教育を実施。

教職員研修

- ・大学教授や小・中学校長を招聘し、道徳教育の具体的な実践に向けた教職員研修を開催。

他校への広がり

- ・高人教研究大会において発表。

地域との連携

- ・地域の方を招聘し、各クラスの人権委員を対象に「在り方生き方」に関する講演会を実施。



「特別の教科 道徳」の指導例

主題名 自分らしくあるために
 内容項目 D よりよく生きる喜び
 教材名 山桜
 (奈良県教育委員会)
 指導学年 中学校第3学年

ねらい
 主人公のものの見方や考え方の変化、父が主人公に伝えかったことなどについて考えたり、話し合ったりすることを通して、自己の弱さを克服し、人間として精一杯生きることの大切さや喜びに気付かせ、よりよく生きようとする意欲を高める。

教材について

本教材は、桜の名所である吉野山をモチーフに、吉野山の桜の品種である山桜を自分と重ね、自分の弱さを克服し逆境を乗り越えようとする主人公の姿を描いている。多くの中学生にとって主人公の姿や悩みは等身大であり、主人公のものの見方や考え方の変容を共感をもって受け止めることができるであろう。教材では、父が主人公へ伝えたい思いを、山桜が「自分らしくあるために、自分の花を咲かせる」という比喩表現に象徴している。学習展開では、この言葉をキーワードとする話し合いを設定したい。さらに、そのことが今も「わたし(主人公)をずっと支えている」ことの意味について考えさせることで、自己の弱さを克服し、人間として精一杯生きることの大切さや喜びに気付かせ、よりよく生きようとする意欲を高めたい。

	学習活動	主な発問 (○、◎) 予想される生徒の反応 (・)	補助的な発問 (※)	指導上の留意点
導入	1. 吉野山の桜について話し合う。	○吉野山の桜を知っていますか。 ・家族で行ったことがある。 ・シロヤマザクラという品種を初めて知った。		・自由に話し合わせ、教材への興味・関心を喚起する。
展開	2. 教材文「山桜」を読んで話し合う。	○部屋に閉じこもった「わたし」はどんなことを思っていたでしょう。 ・やっぱり自分には才能がないんだ。 ・これ以上バレーボールを続けるのは辛い。 ※ポッキリ折れたものとは何だと思いませんか。 ・頑張ってきた気持ち。 ・精一杯のプライド。 ○人知れず咲く山桜を見たとき、「わたし」の胸にこみ上げてきた熱いものとは何だったのでしょうか。 ・目立たなくても力の限りに咲いている山桜への共感。 ・人知れず咲く山桜にこれまで頑張ってきた自分自身を重ねたことによる悲しみ。		・部活動での体験などを出し合い、努力が報われなかったという主人公の悔しさや自分に才能がないと思う悲しさなどに共感できるようにする。 ・山深く誰も見る人がいなくても毎年花を咲かせている山桜に自分自身を重ねながら、主人公が感じた健気さやいじらしさ、気高さなどについて自由に話し合わせ、考えを深められるようにする。
展開	3. 主題について考える。	◎あの日の山桜が、今も「わたしをずっと支えている」とは、どういうことだと思いますか。 ・あのとき感じた父の温かさがずっと自分の支えになっている。 ・だれのためでもなく、自分らしく生きるために頑張ろうと思えるようになった。 ※主人公のものの見方はどう変わったと思いませんか。 ・他人と比較するのをやめた。 ・自分が自分を認め、今できることを精一杯することが自分らしさである。		・自分自身に対して言い聞かせるように話す父の姿から、主人公への励ましの思いとともに父自身の生き方についても考えさせる。 ・山桜の姿や父の思いを心の支えにして生きてきた主人公について話し合うことを通して、自分の弱さを克服し、人として精一杯生きることの大切さや喜びに気付かせ、自分らしくあるための心構えについて考えさせる。 ・ワークシートに書き込むことを通して、じっくりと考えさせ、それを基に積極的に話し合えるようにする。
終末	4. 学習を振り返る。	○今日の学習を通して、考えたことや思ったことを書きましよう。		・自分らしくよりよく生きるよさについて振り返らせる。



山桜

吉野山 こそずるの花を見し日より 心は身にも そはずなりにき

古く西行法師がうたったように、吉野山の桜は山全体に爛漫らんまんと咲き広がるその見事な景観で広く名を知られている。下千本から中千本、上千本と開花していき、毎年四月半ばに迎える見頃には、吉野山は花見客で身動きもできないほどのにぎわいを見せる。同じ桜を、西行法師を始め古来多くの人々がめでてきたことを思うと、その桜の美しさへの憧憬しんけいの念が歴史を経て我々の心に深く息づいていることを感じずにはいられない。中でも太閤秀吉の花見はことに有名であるが、吉野山の桜もまた、そんな人々、歴史そのものをずっと見続けてきたとも言える。

ところで、この吉野山の桜は山桜でもあることを知っているだろうか。三万本と言われる桜の木も多くは、シロヤマザクラという品種である。日本の桜の名所の多くは、近代になってから整備されたものが多く、その桜の種類は、若葉の前に花の重みで枝が垂れ下がるがごとく一気に咲き誇るソメイヨシノがほとんどである。そのソメイヨシノの華やかさに比べると、若葉と同じくして花開く山桜は、派手さはないものの、控えめな中に気品を漂わせたたたずまいである。

わたしは、この山桜が好きだ。吉野山の山全体を淡い桜色に染める桜の美しさはもちろん好きである。しかし、わたしの心の奥底にいつも凜としてその花を咲かせているのは、山の奥深いところで人知れずひっそり咲いている山桜なのである。

その山桜との出会いは、わたしが中学生の時のことである。当時、わたしはバレーボール部に所属しており、練習に明け暮れる毎日であった。試合の出場メンバーとなることを目指して必死に練習に打ち込み、努力は人一倍していたつもりであったが、なかなかそのメンバーに入ることはかなわなかった。地区予選を一週間後に控えたある日のこと、監督がみんなを集めて言った。

「次の試合は、県大会につながる大切な予選だ。これまで皆で精一杯練習に打ち込んできた成果を出そうじゃないか。試合の出場メンバーをこれから発表するが、試合に出る者も控えの者も変わらずこのチームの大切な一人一人だ。地区予選突破に向けてそれぞれが自分のポジションで力を尽くしてもらいたい。」

わたしはドキドキしていた。監督はああ言うが、試合の出場メンバーにはみんな選ばれたいに決まっている。そのためこれまで苦しい練習に耐えて頑張ってきたのだ。何よりわたしは今回は自信があった。最近、練習では調子がとてもよかったし、チームメイトもそのことを認めてくれている。わたしは監督の口もとをじっと見つめた。

「次の試合のメンバーは、山本、吉田、山田……。」



結局、今回も監督がわたしの名前を呼ぶことはなかった。その日の帰り、これまで以上にわたしは落ち込んでいた。チームメイトは残念がって口々に慰めてくれたが、わたしはそんな言葉など全然耳に入らなかった。これだけ頑張ってもやはり駄目だった。やっぱり自分には才能がないのだ……これまでどこかにそう思う自分がいた。でも必死にそう考えないようにしてきたのだ。努力すれば必ず結果が付いてくるはずだ。そう自分に言い聞かせて、今日まで頑張ってきた……なのに……。何かが自分の中でポッキリと折れたようだった。

「優子、入っていいか。」

その日の夜、いつものように遅く帰ってきた父がわたしの部屋をノックした。家に帰ったわたしの様子がおかしいことに気付き、どうしたのかと根掘り葉掘り聞く母に、バレーボールはもうやめるんだとわたしは言い放って部屋に閉じこもっていた。部屋に入ってきた父は言った。

「なあ、優子。明日、部には行かないのか。」

「行かない。やっぱりわたし、才能がないのよ。頑張ったところで出場メンバーにはなれっこないしね。」

わたしは投げやりな気持ちでそう言った。多分、父のお説教がこの後始まるんだろうと思いつながら……。ところが父の言葉は意外なものだった。

「そうか。それなら明日は休みだし、一緒に花見に行かないか。」

次の日、わたしは初めて部の練習をサボって、父と花見に出かけた。吉野山の桜は本当に見事だった。戻る車の中でわたしは父に言った。

「お父さん、桜、きれいだったね。あんなに美しい花を咲かせて、多くの人々に見てもらえて喜んでもらえて。桜たち幸せだよね……それに比べて……。」

「なあ、優子。もう少しつき合わないか。」

そう父は言う、吉野川沿いの国道から千石橋を渡ってさらに山の方に車を向けた。わたしは、吉野山の桜を思いながら、いつか試合で活躍することを夢見てバレーボールの練習に打ち込んできたこと、そんな自分を横目に友だちは次々と試合に出ていること、自分には才能がない、これ以上続けてもおそらくずっとこのままだろうことなど、堰を切ったように父に話した。父はずっと黙って聞いていた。やがて父は車を止めた。

「優子、少し歩こうか。」

車を降りて、細い山道に入った。どこに行くのだろう。わたしは父と一緒に山道を登りはじめた。次第に山道は細くなり、辺りはどんどん山深くなっていく。やがて父は山道から外れ、道なき山の中を、草をかき分けながら進み出した。

「ちよっとお父さん、こんなところに入っていくの。」

言いながら、わたしは黙々と歩く父の背中を必死に追いかけた。父の背中には、それ以上何も言えないような雰囲気を感じられた。十分歩いただろうか、父が突然歩みを止めた。

「優子、見てごらん。」



一本の山桜がわたしたちの目の前で、今が盛りとばかりその花を咲かせていた。他の緑の木々に混じって埋もれそうになりながら、それでも精一杯に咲いている。それを見た瞬間、父がわたしに言いたいことが胸の中に伝わってきたような気がした。

「優子、あの山桜は毎年、あそこであややって咲いているんだ。周りをいろいろな木々に囲まれ、その中で目立たないかも知れんが自分の花をあややって精一杯咲かせている。だれも見に来る人はいないし、だれも知らない。でも自分の花を力の限りに咲かせて、そして人知れず散っているのさ。そしてまた次の年、見る人もない自分の花を咲かせる。だれかのために咲いているのではない。だれに気付いてもらわなくとも、ただ精一杯自分の花を自分らしくあややって毎年咲かせているのさ。」

胸の奥に熱いものがこみ上げてきた。たった一人で力の限りにその花を咲かせている山桜が、わたしの目の中で揺れ、そしてじんだ。

「父さんは昔から何かうまくいかないことがあると、山桜を思い出すんだ。仕事でもそうさ。自分では精一杯やっていても必ず報われるとは限らない。認めてもらえないことも多いさ。そんなとき、人知れず花を咲かせている山桜を思い出すんだ。だれのためでもなく、ただ自分のために、自分らしくあるために凍とその花を咲かせている山桜をね。優子、自分の花は自分のために精一杯咲かせればいいんだ。そのために力一杯頑張ればいいのさ。」

そう自分にも言い聞かせるように話す父の姿を見ながら、あまり普段は愚痴をこぼしたり、声を荒げたりすることのない父が、ときおり深夜一人でお酒を飲んで顔を真っ赤にしていることがあるのを思い出していた。あんなとき、父は山桜を思い出しているのだろうか……そう思うと、父への言葉にならない思いが胸に込み上げてきた。同時に、何かよく分からないけれど温かいものがわたしの心の中を満たしていくのを感じた。

「自分らしくあるために、自分の花を……か。」

その日から、わたしのものの見方が少し変わった。バレーボール部では相変わらず出場メンバーにはなれなかった。しかし、練習はもちろん、試合中の応援にも身を入れてやるようになった。地区予選は結局突破できなかったが、チームメイトと流した涙は、試合に出られなかった悔しさからでは決してなかった。ただ自分がその時でできることを精一杯にすることの大切さ、そしてそんな精一杯の気持ちをごこに向けるのか、何に向かって頑張るのか、自分らしさとは何なのか、そんなことを、父とあの山桜から教わった、いや考えさせられたようにわたしは思うのだ。

父と見たあの山桜は、今もわたしの心の奥底でずっとわたしを支えてくれている。
今年も桜の季節がまたやってくる。



